心霊現象はオナラの香り？（加筆修正前）

　いきなりだが、幽霊というものの存在を信じるだろうか。
俺――岸キョウイチは信じない。
いや、この表現は正確ではない。
幽霊というのは、存在するという証拠もないが、存在しないという証拠もない。
そのため、俺は「存在する可能性は否定しないが、まずいないだろう」というスタンスを取っている。
それが災いし、俺はこの場所に来る事になったのである。

＊

　事の始まりは 12 時間ほど前、土曜日の放課後まで遡る。
その時、俺と友人との間で「幽霊は存在するか」という事が話題になった。
友人は絶対にいると主張したが、俺は前述のように幽霊の存在について割と否定的である。
そんな俺に対し、友人は「幽霊を信じないなら、心霊スポットで写真を撮ってこい」と言い放った。
友人は言い出したら聞かないタイプなので、俺は仕方なくこの緑地公園へとやってきたのだ。
「此処か」
目的の場所はすぐに見付かった。
緑地の最奥部にある杉の大木。
此処で写真を撮れば、一件コンプリートだ。
「一応、最高画質にしておくか」
ポケットからスマホを取り出し、画質を最高に設定する。

ポンポンッ。

「ん？」
ふいに背後から肩を叩かれた。
振り返ってみるが、周囲には誰もいない。
（気のせいか）
気を取り直して、スマホをインカメラにして構える。

ポンポンッ。

再び背後から肩を叩かれた。
しかし、スマホの画面には俺以外、誰も映っていない。
（どういう事だ？）

トントンッ。

また背後から肩を叩かれた。
というか、絶妙な力加減で肩を揉まれている。
『お客さん、凝ってますねぇ』
さらには声まで聞こえてきた。
この声からすると、俺と同世代の少女だろうか。
無論、スマホの画面に俺以外は誰も映っていない。
「そこまでやるなら、姿を見せてくれないか？」
『ちょっと待ってね』
そんな声と共に、肩を揉んでいた手が離れていく。
程なくして、目の前の何もなかった空間に、１人の少女が出現した。
年齢は俺と同じぐらいだろう。
身長は150ｃｍ強、雪のように白い髪を肘の辺りまで伸ばしている。
顔立ちは整っており、何処となく猫のような雰囲気を感じさせる。
今の説明だけを聞くだけなら、出現方法以外に問題がないように思うかもしれない。
しかし、彼女の姿には特筆すべき問題がある。
透き通っているのだ。
比喩ではなく、物理的に。
着ているのは白い死に装束ではなく黒いセーラー服だが、彼女がこの世の者でないのは明らかだ。
『初めまして。私はイチハ、横石イチハ。よろしくね』
半透明の少女――イチハがフレンドリーに自己紹介してくる。
『あなたの名前も訊いていいかな？』
「名乗るほどの者じゃない」
格好付けている訳ではない。
単に得体の知れない存在に、自分の情報を知られたくないだけだ。
『ナノルホドノモノジャナイ・・・何処までが苗字？』
「・・・キョウイチだ」
突っ込む気も失せたので、仕方なく名前だけを告げる。
『キョウイチだね。よろしく、キョウイチ』
「・・・」

イチハが握手を求めてくるが、俺は応じない。
相手は俺の理解を超える存在だ。
警戒しすぎるという事はないだろう。
『もうっ、握手ぐらいしてくれてもいいでしょ！』
イチハが拗ねたように言った直後、
「っ！？」
俺の身体、厳密には右手に異変が起こった。
俺の意思に反するように持ち上がっていき、イチハとの握手に応じたのだ。
「何をした？」
『ふっふっふ、私だって伊達に長いこと幽霊やってないよ』
イチハが偽悪的に笑ってみせる。
「長いことって、いつから幽霊やってるんだ？」
『1971 年からだよ』
「1971 年・・・50 年近くも幽霊やってるのか」
『忘れもしない 1971 年４月３日。此処で待ち合わせしてたんだけど、心臓発作を起こしちゃって・・・』
イチハが先程までとは打って変わってしんみりした口調で言う。
「そうか」
俺が反応に困りながら頷いた直後、
『まあ、死んじゃったものは仕方ないよね』
イチハ自身がしんみりした空気を一蹴してみせた。
「そんなに雑でいいのか？」
『何十年も幽霊やってると、そんなもんだよ』
「・・・」
こいつは本当に幽霊なんだろうか。
短時間のやり取りだが、ただ半透明なだけの奴に思えてきた。
『ところで、ちょっと頼みたい事があるんだけど、ダメかな？』
「取り憑く相手を探してるなら、他をあたってくれ」
『そうじゃなくて、私が成仏するのを手伝ってくれないかな？』
「霊媒師も他をあたってくれ」
『お祓いするんじゃないよ。私は心残りを解消して欲しいの』
「心残りを解消？」
『うん。ダメかな？」
「・・・」
確かに幽霊――自縛霊というのは、この世に強い心残りがあるから成仏できないといわれている。

それが本当なら、その心残りさえなくなれば、こいつは成仏できるという事になる。
「まあ、乗り掛かった船だ。俺にできる範囲でなら、協力してやる」
少し考えた末、俺は彼女に協力してやる事にした。
親切心というよりは、このまま帰ったら取り憑かれるのではないかと危惧したからだ。
『ありがとう！最近は人間関係が希薄になってるっていうけど、あなたみたいな親切な若者もいるんだね！』
「お前、いくつだよ？」
『生年月日でいったら、もう還暦は過ぎてるよ？』
「ああ、そうだったな」
イチハは見た目こそ若いが、これは 1971 年に亡くなった時点での姿だ。
仮に現在まで生きていたとしたら、確かに還暦を越えている計算になる。
「それで、俺は何をすればいんだ？」
『ちょっと待ってね。準備するから』
そう言った直後、
「なっ！？」
目の前で予想外の出来事が起こった。
イチハの姿が半透明でなくなったのだ。
唯一の幽霊的な要素が消えた事で、イチハの姿は普通の人間と何ら変わらないものになってしまった。
「これでよし、っと」
自身の状態を確認するように、イチハがその場でくるりと回ってみせる。
「さっきまで透けてたのは何だったんだ？」
「ほら、それっぽく登場しないと、幽霊だって信じてもらえないでしょ？」
「・・・」
頭が痛くなってきた。
「さてと、準備が整ったところで、始めようか」
「俺は何をすればいいんだ？」
「何もしなくていいよ」
「どういう・・・っ！？」
問い掛けるより早く、俺の身体に異変が起こった。
全身が石化したように固まり、指１本動かせなくなってしまったのだ。
「な、何をした・・・？」
唯一動く口だけを使って、俺はイチハに問い掛ける。
「大丈夫。命までは取らないから」
そう言いながら、イチハはその場でくるりと反転し、俺の方に尻を突き出してくる。
「それじゃあ、お願いね♪」

イチハが心底楽しげに言うと、俺の意思とは関係なく身体が動き始めた。
イチハの前で膝立ちになって頭をスカートの中に潜り込ませ、白いショーツに包まれた彼女の尻に顔を押し付ける。
「そうそう、そのまま動かないで」
「むぐぐぐ・・・」
動きたくても動けない。
反論しようにも、顔を彼女の尻に押し付けた状態では喋る事もできない。
（こいつは何がしたいんだ？）
「じゃあ、出すよ」
（出す？）
俺が首を傾げた直後、

ぶうううううううううう～～～っっっ！！！

彼女の尻から爆音と共に生温かい風が噴き出した。
「むうううううううっ！？」
腐った卵を鼻から流し込まれたような悪臭（におい）に、思わず苦悶の声を上げる。
「驚いた？これが私の心残り。１度でいいから、男の人に心行くまでオナラを嗅がせたかったの」
「くっ！」
強烈な臭気から逃れようと全身に力を込めるが、身体は全く自由にならない。
それどころか、

ぶぶぶぶぶうううううう～～～っっっ！！！

彼女の放った２発目のオナラをクンクンと鼻を鳴らして嗅いでしまう。
「っっっっっっ！？」
凶悪な臭気が嗅覚を蹂躙し、脳天にゴルフクラグのフルスイングを喰らったような衝撃が襲い掛かってくる。
とても幽霊が出したとは思えない。
そもそも幽霊というのは、オナラするものなのだろうか。
様々な考えが頭を巡るが、

ぶぼぼぼぼぼぼぼおおお～～～っっっ！！！

それらはイチハのオナラによって、あっさりと霧散してしまう。
「どう？私のオナラの悪臭(におい)は？臭くて鼻が曲がっちゃいそうでしょ？」
「ぐっ・・・」
「まだまだ出るから覚悟してね・・・んっ♪」

ぶぼおおおおおおおぉぉぉぉ～～～っっっ！！！

イチハの楽しげな声と共に、さらに強烈なオナラが俺の顔を呑み込む。
「っ・・・！」
何とか呼吸を止めて耐え忍ぼうとするが、
「むううううううううううううっ！？」
自由を奪われた身体は呼吸と止めるどころか、積極的にオナラを吸い込んでしまう。
「そろそろいいかな♪」
「？」
また身体が勝手に動き出し、イチハの尻から顔が離れていく。
（ようやく気が済んだか・・・）
臭気で朦朧とする中で安堵する。
しかし、それも長くは続かなかった。
両腕が俺の意思とは関係なく動き、イチハの尻を包むショーツを脱がせ始めたのだ。
「いやん、強引なんだから♪」
わざとらしく言いながら、イチハが身体をくねらせる。
そんな形だけの抵抗が意味を為すはずもなく、俺の両手はイチハのショーツを脱がせてしまう。
「むぐっ・・・」
染み１つないイチハの尻が露わになったところで、俺は再び彼女の尻に顔を押し付ける。
無論、俺の意思ではない。
「第２部の始まり始まり～・・・んっ！」

ぶぶぶうぶううううううううう～～～っっっ！！！

イチハが宣言した直後、今まで以上に強烈なオナラが顔に浴びせられる。

「むうううううううっ！？」
ショーツがなくなった事で、オナラの臭気がよりダイレクトに鼻腔へと流れ込んでくる。
鼻をもぎ取りたくなるような臭気が呼吸器官を蹂躙し、全身がビクビクと痙攣する。
「ほら、深呼吸して」
イチハの言葉に呼応して、俺の意思とは関係なく、身体が深呼吸を始める。
そして、息を吸い込むタイミングに合わせ、

ぶううおおおおおおおおおお〜〜〜っっっ！！！

イチハがオナラを放ってくる。
「っっっっっ！？」
噴き出した臭気をすべて吸い込む形となり、頭の中が黄土色に染め上げられる。
既に悲鳴を上げる気力すらなくなっていた。
「ああっ、大きいのが降りてきた。これで最後だから、思いっ切り吸い込んでね」
イチハの言葉を聞きながら、俺は肺に残った空気をすべて吐き出していく。
俺の意思で肺の臭気を追い出すためではない。
イチハの意思でより多くの臭気を吸い込ませるためだ。
時間にして 10 秒ほどだろうか。
俺の肺にあった空気がすべて吐き出され、再び鼻で息を吸い込み始める。
そのタイミングで、

ぶぶううううううううううううう〜〜〜っっっ！！！

イチハが最大級のオナラを放った。
「っっっっっっ！？」
その筆舌し難い激臭(におい)がすべて肺の中に流れ込み、俺は意識を失った。

＊

　顔に当たる眩しい光で、俺は目を覚ました。
「此処は・・・？」
上体を起こして周囲を見回し、どうにか状況を理解する。
どうやら俺はイチハのオナラで気絶した後、そのまま放置されていたようだ。
時刻を確認すると、ちょうど夜明けの時刻。

「朝日に起こされたのか」
そう呟いて、俺は身体の汚れを払いながら立ち上がる。
「あいつも成仏したようだな」
いや、朝になったから消えただけか。
いずれにしろ、もう俺には関係ない事だ。
さっさと帰って、シャワーでも浴びるとしよう。
「えっと、電車の時刻は――」
時刻表を確認すべく、スマホを取り出す。
『その機械で電車の時間がわかるの？』
「・・・何故いる？」
『幽霊が丑三つ時にしか出ちゃいけないなんて、誰が決めたの？』
「・・・」
もはや言い返す気にもならない。
「・・・帰っていいか？」
『此処から近いの？私の部屋もある？』
「そう言うと思ったよ」
楽しそうに目を輝かせるイチハを見ながら、俺は深々と溜め息を吐いた。

終